

## 論文審査の結果の要旨

報告番号	甲第 952 号	氏名	三島吉登
論文審査担当者	主査 森泉哲次 副査 村田敏規・多田剛		
(論文審査の結果の要旨)			
<p>日本人の起源に関する人類学的研究から、渡来系の弥生人は瞼裂縦径が狭く、はっきりした重瞼線がなく、丸く高い眼窩上縁をもち、原住民である縄文人は瞼裂縦径が広く、重瞼線が明らかで、平らで低い眼窩上縁をもつのが特徴とされている。</p> <p>これらの特徴のなかで、瞼裂縦径が狭いと眼窩上縁は高く、瞼裂縦径が広いと眼窩上縁が低いという点は、解剖学的矛盾がある。この矛盾に対し、重瞼線がなく瞼裂縦径が狭い日本人は、前頭筋の持続的収縮で眉毛と上眼瞼前葉を挙上して開瞼しているため、正面視で持続的に眉毛挙上する際の機械力によって眼窩上縁が丸く高くリモデリングされるという仮説を三島らはたて、それを検証した。</p> <p>対象は鼻骨骨折または眼窩下壁骨折で眼窩の3D-CT撮影をした男性23例(平均24.5歳±7.2)で、10例は明らかな重瞼線がなく持続的に眉毛を挙上しており、13例は重瞼線があり持続的な眉毛挙上をしていなかった症例である。重瞼線がない群は指で眉毛が動かないようにすることで開瞼が制限されることを、三島らは確認した。</p> <p>重瞼線のない群はある群にくらべて眉毛を挙上しているかを評価した。瞳孔の中心を通る垂線上で眉毛の最上点を取り、内眼角と外眼角を結んだ線との距離を計測した。</p> <p>次に、正面視で持続的に眉毛を挙上していることは、3D-CTの正面像での眼窩上縁の高さに影響するかを評価した。顔面の正中線と頬骨前頭縫合の midpoint との距離をHDとし、眼窩上縁の最上点とHDの線との距離をVDとしてVD/HDを各群間で比較した。</p> <p>最後に、正面像での眼窩上縁の形状と矢状断での眼窩上縁の形状に関連はあるかを評価した。眼窩最上点を通る矢状断でフランクフルト平面と平行な線と眼窩上壁前方の接線との角度を計測し、上記のVD/HDとの関連を検討した。</p> <p>その結果、三島らは次の結論を得た。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. 明らかな重瞼線のない群では、重瞼線のある群に比べて眉毛が高かった。</li><li>2. 重瞼線のない群の方が、重瞼線のある群に比べて眼窩上縁が高かった。</li><li>3. 眼窩上縁が高いほど、眼窩上縁の矢状断像が鈍角だった。</li></ol> <p>これらの結果から、三島らは、重瞼線のない群では正面視で持続的反射的な前頭筋の収縮による眉毛挙上をし、同時に眼窩上縁周囲の軟部組織を機能的に引き上げて開瞼するため、眼窩上縁に機械的圧迫が働き、高く鈍な眼窩上縁を形成すると考えられると結論付けた。よって、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。</p>			